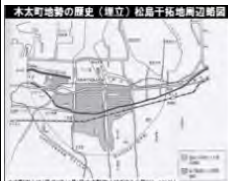
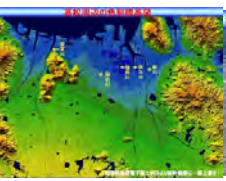


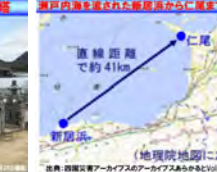
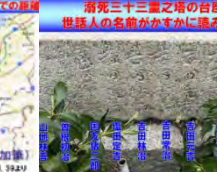
香川県の水害・治水に関する防災風土資源

整理番号	香水 1	高松中心街 2 万 2 千戸高潮水害							
災害種別	水害・治水	地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	香川県高松市福岡町 4 丁目								
見所・アクセス	平成 16 年 8 月の台風 16 号では、激しい雨と大潮の満潮が重なり高松市を中心に、床上・床下浸水が約 2 万 2 千戸が高潮水害を被りました。これまで記録されていた最高潮位を 50 センチメートル超える約 T.P2.5m に達しました。高松市扇町 3 丁目の道路の電柱には、その時に浸水位が表示されています。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4								
解説文	平成 16 年（2004）8 月の台風 16 号では、激しい雨と大潮の満潮が重なり、記録的な高潮が香川県沿岸の各地を襲い、住宅などの建物は浸水被害に見舞われました。高松港では観測 1 史上最高の 2.46m の潮位を記録するなど、県内各地で最高潮位を更新しました。この結果、写真 1 のように高松市を中心に、床上・床下浸水が約 22000 戸と戦後最大となりました。この災害で、多くの方が高松市など瀬戸内海沿岸部の土地が高潮に弱い大地であることを認識し防災を考えるきっかけになりました。その高潮の浸水被害は、写真 2 に示す、戦後、米軍が撮影した高松市の航空写真に浸水エリアを比較したものから、塩田跡地などの土地の低い場所が浸水していることがわかります。現在、住んでいる場所が元々どのような土地であったか知るためにも、先祖帰りの視点 自分が住んでいる本当の地形を知ることが必要であります。また写真 3、4 の扇町には、平成 16 年高潮浸水高を電柱に表示した状況を示します。 四国防災八十八話の 80 話では平成 16 年（2004）は古来稀にみる年で、台風が日本に 10 個、四国には 6 個も上陸し、瀬戸内海側の香川県、愛媛県でも大きな被害を受けました。中でも台風 16 号の際には、香川県においては台風通過が大潮の満潮時刻と重なったため、これまで記録されていた最高潮位を 50 センチメートル超える未曾有の高潮が発生し、高松の中心街など約 2 万 2000 戸が浸水しました。その時、消防署員として救出活動に携わった人の証言が紹介されています。「台風 16 号では警報発令後、日新小学校区へ急行しました。その時の光景は忘れられません。「なぜこんなことが」と思うほど壮絶で、道路を水が流れる中、現状確認に行こうとするのですが、手すりにつかまっても足元がすくわれて押し戻される状態でした。各家庭を回って小さなお子さんやお年寄りを抱えて安全なところまで誘導するにも深夜で何も見えず、危険でした。一軒一軒確認しながら取り残された人たちを救助するのは、とにかく時間がかかります。消防では太刀打ちできない災害があることを実感しました。大災害になればなるほど被害は甚大で、すぐに救助に向かえない場合もあります。どの家に取り残された人がいるかという情報があるかないかで、救助までのスピードが違います。被害を最小限に抑えるために、また二次三次の被害を招かないために、地域と連携をとっていかなければと痛感しました。」と語っています。								
得られる教訓	消防だけでは太刀打ちできない高潮災害で、被害軽減のため、地域と消防などが連携を図ることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

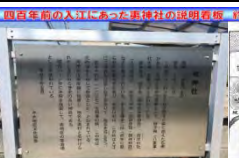
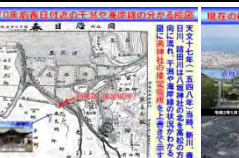
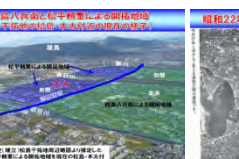
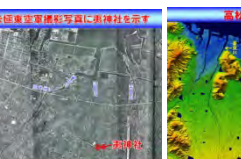
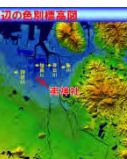
整理番号	香水 2	大禹謨（だいうぼ）							
災害種別	水害・治水	地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	香川県高松市香川町大野								
見所・アクセス	香川県高松市が誇る名園、栗林公園の商工奨励館の中庭に『大禹謨』と達筆で書かれた縦 58cm 横 20cm の石碑があります。これは、いまから約 380 年前、寛永の頃までは香川郡大野の西（香川県立香川中央高校付近）で川筋が二股に分かれた香東川を、現在の香東川に固定し、御坊川へ香東川の洪水が流れないようにした改修を行った西島八兵衛が記したもの云われています。この碑のレプリカは、改修した場所の香川町大野の香川中央高等学校の運動場の北西の道路沿いにあります。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5				
									
写真 6	写真 7	写真 8	写真 9						
解説文	香川県高松市が誇る名園、栗林公園の商工奨励館の中庭に『大禹謨』と達筆で書かれた縦 58cm 横 20cm の石碑(写真 1)があります。これは、現在の高松発展の基礎を築いた治水・利水の偉人、西島八兵衛の筆なるものです。彼は、いまから約 380 年前、寛永年間に香東川の改修を行いました。私たちが住んでいる今日の高松市は、かつて江戸時代の寛永の頃までは香川郡大野の西（香川県立香川中央高校付近）で川筋が二股に分かれた香東川氾濫原でありました(写真 2 の図)。一つの流れは、現在の御坊川や栗林公園方向に流れる川筋で、もう一つは現在の香東川で、これを、寛永 8～9 (1631～2) 年、現在の香東川に固定し、高松の栗林公園方向や御坊川へ香東川の洪水が流れないようにしました。彼はこの普請を行うにあたって自ら『大禹謨』と書して石に刻ませ、流れを堰止めた分岐点、(現在の香川中央高校西) に建てたのであります。現在のそのレプリカ(写真 3 の右下写真)が、その近くに建てられています。 およそ 470 年前の天文 17 (1548) 春日付近惣図(写真 4)には、春日川、新川が高松の方に流れ、当時の干潟、海岸線の状況がわかります。また香東川は紫雲山の南側で現在の御坊川に流れる本流と天満宮の方向に流れる支流があることがわかります。 さらにこの旧香東川の川筋に栗林公園が誕生します。栗林公園の南端に位置している「吹上げ」が水源となり、写真 5、6、7、8、9 のような現在の栗林公園が誕生していくことになったのです。 禹は中国古代の大聖で、黄河の氾濫を治めて衆望を得、とき天子瞬のあとうけて帝位につき、夏の国の始祖となった人で、「治水の神」として崇められています。この禹の遠大な理想、謨（はかりごと）を記述したものです。今日の高松市の繁栄を築いた西嶋八兵衛は、このほかにも約 90 のため池の築造など治水利水普請を行い讃岐の水を治めました。 現在、香東川の治水を成し高松の安全安心を築いた西嶋八兵衛を思うとき、この人の仕事には品格を感じます。彼が築いたのは、堰堤や堤防という単なる構造物ではなく、地域の将来を見据えた住民への思いが込められているように思います。380 年後の今日もこの社会資本整備は活かされており、水害・治水に関する四国の防災風土資源といえるものであります。								
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9					
得られる教訓	行政は効率や数字だけを重視するのではなく、地域に暮らす人を思い、地域の将来を見据えて、正しい道に適合しているかどうかを基準として社会資本整備を考えるべきであることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香水 3	新川の名の由来に残る治水対策								
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	香川県高松市東山崎町、元山町									
見所・アクセス	高松市東山崎町、元山町には、新川の名前の由来に関わる春日川の跡地が今も田んぼの中に川らしき跡が残っています。跡地へは、高松自動車道の高松中央 IC から高架の自動車道路下の道路を東側に向かい春日川を渡った交差点を左折し、県道 10 号線を北に 1.7km 行ったところに 1m 程度の旧堤防があります。									
写真・図										
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		写真 5	
写真・図										
	写真 6		写真 7		写真 8		写真 9		写真 10	
解説文	新川は「なぜ新川なの?」という話をよくきかれますが、昔の治水対策にその由来があります。なぜ、新川って名前と呼ばれているのでしょうか。新川と呼ばれるには、新しく開削された川なのでしょう。 実際、古い地図や今も田んぼの中に残る川らしき跡、現在の航空写真(写真1)などからわかります。高松今昔物語(建設省四国地方整備局香川工事事務所平成 13 年 7 月発行)の記載の中に、春日川に合流していた推定される新川の場所図(写真2)があります。 図には新田開発前の海岸線の推定線とともに昔の新川の流れていた場所が描かれています。その図によると、新川は昔、久米池の南、久米山の西の東山崎町あたりから元山町で春日川に合流していたと思われます。今のような流れになった時期は、明らかではありませんが江戸初期だったと考えられます。 新田開発については、1746(延享 3)年に増田不意が著した「讃州府誌」の巻之一、寛永年間についての記載の中に、「十四年春、西嶋氏堤防を香川郡福岡、山田郡木太、春日の新田海濱に築き、潮汐を障げ、稲田と為す。之を新開と謂ふ。」と 1637(寛永 14)年に西嶋八兵衛が堤防を築いて新田開発をしたことが記されています。木太町郷土誌(平成 7 年 12 月 1 日木太町郷土誌を作る会発行)の松島干拓地周辺略図(写真6)によると、新川は、この江戸時代初めの新田開発や洪水から春日川下流域を守るため、同じ時期に造られたと筆者は考えています。それを裏ける天分十七年(1548)春日付近惣図(写真7)には当時の春日川、新川が高松の方に流れ干潟、海岸線の状況がわかります。また徳川末期時代の地図(写真8)には新川が描かれています。さらに高松周辺の色別標高図(写真9)から現在でも低地であることがわかります。西嶋八兵衛による開拓地域と新川の関係を航空写真(写真10)に示す。 このように上流から流れてきた洪水を下流域を守るために新しい川に分離して海まで流す手法は、放水路方式として明治以降の治水対策として多く用いられています。2007 年 10 月に筆者が撮影した航空写真(写真1)には、川らしき跡の 2 条筋跡が水路や道路として水田などに残っている様子がわかります。Google の写真地図ではさらにはっきりわかります。 また現地には写真3のように旧の春日川堤防が現在も一部残っています。また春日川の堤防上から撮影した写真4には、旧堤防と水路の間の旧河道跡と思われる田畑が直線に残っています。さらに農道となった旧堤防跡から現在の新川堤防を望む写真5からもその状況が確認できます。是非、一度現地に行って 2 条筋跡を確認して見てください。									
得られる教訓	新川は、川の名の由来のとおり今日の春日川下流域の発展の基礎を築いた春日川の放水路であることを教えています。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

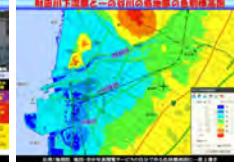
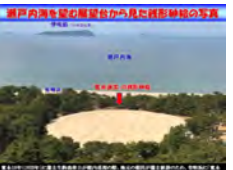
整理番号	香水 4	「中央通りは香東川が流れ」の伝承がある洪柿地蔵							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	香川県高松市中野町 1 4-6 洪柿寺								
見所・アクセス	洪柿寺は、高松市の中央通りに面した四国新聞社本社ビルの南側道路を西へ 100m 進んだ先にあります（寺の南方向には有名な栗林公園があります）。寺の壁には「中央通りは香東川が流れ」とある洪柿地蔵の由来の説明板（写真 1）が、入り口には「かつてこのあたりは、大川の西堤で川を渡る船が出ていました」とある洪柿地蔵の看板（写真 2）があります。								
写真・図	     写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5								
	     写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10								
解説文	今からおよそ四百年前、現在の香東川とは別に、かつて高松ではもう一本、川が流れていました。香川町大野、現在の香川中央高等学校あたりから分岐していた。もう一本の旧香東川は、その分岐点から栗林公園、さらには高松の中心部を通過して高松城の西側を流れていました。当時香東川は、たびたび洪水をおこし高松の城下町や農地に氾濫し、周辺住民は常に水害に悩まされていました。そこで、寛永年間、藩主生駒高俊の家臣、西島八兵衛（1596～1680 年）が藩主の命を受け、現在の香川町大野から東西に分岐していた香東川を西に一本化する香東川の付け替えを行いました。八兵衛の香東川の付け替え以前の旧香東川は、四国開発の先覚者とその偉業や香東川物語が示す図（写真 3）のように高松の中心部を流れていたことが分かります。現在は、堤防の形跡は全くなく、その位置を確定することができませんが、高松市街地図上で旧香東川と堤防の位置を推定している香東川物語（平成 30 年 12 月 14 日丸山正執筆）の図（写真 4）によると、「現在の南新町・田町商店街のあたりが旧香東川の東側堤防、洪柿地蔵・法泉寺が旧香東川の西側の位置であったことから、中央公園の西側が旧香東川の西側の通り」とあり、現在の高松の中心部を通過して高松城の西側を流れ海に抜けていたことが読み取れます。 この香東川の付け替えを行った西島八兵衛の偉業を紹介した看板（写真 5）が旧四番丁小学校跡（高松市埋蔵文化財センター）にあります。（北西隅には、西島八兵衛の屋敷跡（写真 6）があります）。 洪柿寺にある洪柿地蔵の由来の説明板（写真 1）には、「このあたりは西の渡し場で、人々がたくさん集まっていた。ちなみに東の渡し場は、現在の藤塚町」とあり、写真 7 に示すように、旧香東川の東側堤防とされる田町商店街と藤塚神社の直線距離は 200m 余りあり、当時の旧香東川はかなり大きかったことが推定できます。 さらに洪柿地蔵の上流にあたる栗林公園には、公園の南端に「吹上」（写真 8）という石の間から吹き上がる噴泉があり、園の水源地となっています。吹上は公園の下に伏流水という地下水が流れている旧香東川の川筋であったことを物語っています。この栗林公園は、はじめは、紫雲山（しうんざん）麓のごく限られた庭園でした。それが西島八兵衛の讃岐在任期間中に、この吹上水源により栗林公園のシンボルといえる、南湖の庭園が築かれていきました。 また現在の高松中央商店街ドーム広場には、高松城外濠の常盤橋と高札場の辻跡を示す高松の城下町の看板（写真 9）があります。曰く、高松城外濠には、かつて城下町から各地に通じる重要な拠点となった常盤橋があったことや、旧香東川の付け替え工事に成功した後の城下町の拡大過程（当時の城下町の南端であった古馬場からさらに南へ、南新町・田町が新たにできた）などが紹介されています。 このように、八兵衛が行った旧香東川の付け替えは、大規模な新田開発を生み、現在の栗林公園を誕生させ、高松の城下町拡大にもつながるという、今日の高松繁栄の礎となりました。最後に、現在の航空写真で高松の中心部の栗林公園から中央通りを流れていた旧香東川の川筋（写真 10）を推定し示します。								
得られる教訓	私たちが暮らしている高松は、かつて香東川の洪水氾濫、水害常襲地帯であったこと。今日の高松発展は、旧香東川の付け替え等の過去からの社会資本整備によって成り立っていることを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで	平成以降

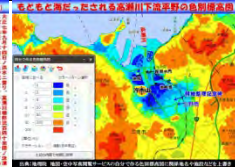
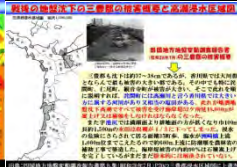
整理番号	香水 5	明治 32 年水害の溺死三十三霊之塔								
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	香川県三豊市仁尾町仁尾丁									
見所・アクセス	新居浜市を流れる国領川の明治 32 年水害で瀬戸内海を流され三豊市仁尾町の浜に漂着した 33 名の犠牲者を慰霊した溺死三十三霊之塔（写真 1）があります。塩田跡地にある三豊市仁尾支所（写真 2）の東にある橋を渡り、約 100m 行った所を右折して所の墓地の宝生庵の前に（写真 3）建立されています。									
写真・図										
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10
解説文	昔の水害に関する古い資料を読んでいると、人が屋根に乗って流されたなどの記録に出会うことがあります。新居浜市を流れる国領川の明治 32 年水害で瀬戸内海を流され（写真 4）犠牲になった 33 人の方を仁尾町住民が供養している逸話を紹介します。 「新修仁尾町誌」1984 年によると、「明治三十二年（一八九九）八月二十八日に四国地方を襲った大暴風雨は各地で洪水の被害を起こしたが、中でも愛媛県新居・宇摩の両郡がとりわけ激しく、別子山村を中心に多数の人々が濁流とともに押し流された。その多くは銅山川から吉野川へ流れたが、一部は国領川から瀬戸内海に出た。・中略・被害の原因として別子銅山の鉱害によって樹木が枯れ、大雨のため一気に出水し土砂の崩壊となったといわれる。この未曾有の大洪水のため多数（一説には一、〇〇〇人余りともいわれる）の死者が出たが、一村すべて流失したところもあり、死体の保護も確認も十分でなかったと想像される」とあり、「溺死三十三霊之塔」の碑文には、「明治三十二年八月二十八日四州之地暴風雨崩山口口人皆栗然、日未曾有事就中予州、尤甚経五日之後溺死漂着我口裏者無 三三人然而其為十四人男子十九人婦女、新居宇摩二郡人村人相集營為埋葬石立碑請僧侶擬福使口之覽者痛惜不止云。世話人 大井重吉・吉田元吉・吉田常治・吉田林治・塩田定吉・国友猪三郎・曾根初治・山地林吾・真鍋三九郎」と、その時の惨状が記されています。碑文の刻字は、現在、風化が進みほとんど見えませんが、（写真 5）には、世話人の名前がかすかに読み取れます。また新居浜市端応寺には、同じ明治 32 年の大雨による土砂災害により、別子銅山で死者 513 人の亡くなった方を供養する碑（写真 6）があります。 写真 7 には、仁尾支所と溺死三十三霊之塔が近くにあることが分かる写真を、写真 8 には、仁尾町の父母ヶ浜から新居浜方向を望む写真を示します。この時の惨禍は四国災害アーカイブスのアーカイブスあたると Vo1. 39 に「明治 32 年（1899）8 月 28 日の台風により、愛媛県の新居郡では国領川（写真 9）の堤防決壊などで大きな被害が出ました。数日後、流木などとともに 33 人の遺体が香川県の仁尾の浜に打ち上げられました。当時は通信や交通の不便から、引き取り手もなく、身元も十分に確認されないまま、遺体は南の墓地に埋葬されました。3 回忌には高さ 2.3m の供養塔「溺死三十三霊之塔」が建立されて、毎年供養が行われてきました。その後、仁尾町（現三豊市）から連絡により新居浜郷土史談会がこの塔の存在を知り、史談会の調査により 23 人の故郷が新居浜であることが判明しました。風水害から 85 年目の昭和 58 年（1983）に、仁尾町長や新居浜市長などが参列して慰霊法要が行われました。」と紹介されています。 この逸話（写真 10）は、明治 32 年、仁尾の人々が新居浜から流れ着いた身元不明者に碑を建て、毎年供養を行ったことは信仰厚く、人情味豊かな土地柄を表したもので、当時の関係者の徳をあらためて讃え、自然災害伝承碑として過去の惨禍の教訓を多くの人に伝えたいものです。									
得られる教訓	昔、新居浜市の国領川水害で瀬戸内海を流され仁尾町の浜に漂着した身元不明者を霊之塔を建立して供養してきた逸話は、当時の人情味の豊かさと惨禍の教訓を伝えるとともに、子々孫々に洪水に備え、水害から自分たちの命や生活を守ることが大事であることを教えてくれています。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	香水 6	明治 17 年鴨部川水害記念碑							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	香川県さぬき市鴨庄 7 9 1-5								
見所・アクセス	鴨部川（かべがわ）の最下流の昭和橋東詰から少し北へいった鴨部川の土手には、明治 17 年の水害記念碑(写真 1)が建立されています。またこの記念碑を建てて治山治水の必要性を説き、鴨部川の改修に尽力した鴨部の財産家、竹内熊太郎の功德碑（写真 2）も鴨庄橋東詰に建立されています。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5				
解説文	鴨部川は、讃岐山脈の雄峰「矢筈山(788m)」に源を発し、四国八十八カ所最終の大窪寺付近で溪流を形作り、その後讃岐平野をゆったりと流れています。五瀬山(243m)東麓から鴨部地区に入る鴨部川は、鴨庄地区をほぼ一直線に北流して、鴨庄湾に注いでいます。鴨部・鴨庄地区は鴨部川を中にはさんで水田の平地が広がり、その水田の東西に南北に走る豊かな連山があります。この鴨庄地区等には、新田、新開の地名などの地名がたくさん残っていて、江戸時代以降の埋め立てや開墾によって平地の開発が進んできたことが分かります。最下流の鴨庄新開地区の鴨部川の土手沿いには水害の記録碑(写真 3)などが残っていて、水との戦いがあったことを今に伝えています。 明治 19 年 5 月建立した水害記念碑(写真 4)は、現在、刻字が見えにくく内容が分かりませんが、竹内熊太郎の撰文であり、新編志度町史下巻によると、碑文（漢文）の解釈文が次のように書かれています。「明治 17 年（1884）8 月 25 日夜、寒川郡鴨部下荘村で、烈風にわかになり、波涛狂奔し堤防を決壊す。その勢い奔馬の如く襲来し、家屋は流され、人はおぼれ、浜に打ちあげられた魚のようであった。稲や甘藷など作物の被害を被らないものはなかったが、幸いに人命には異常はなかった。暴風狂らん中はまさに窮乏のどん底に陥った。ここにおいて村民一同相謀り金穀を集めて被害の救済に当たった。このことが聖聞に達して下賜金を賜い、その難を救恤（きゅうじゅつ）された。これ実に聖主の洪恩の致すところと百姓皆感激した。（中略）わが讃岐の人よく心を一にして堤防の安全に力を致し長く安穩を保ちこの惨状を忘れるようにしたい」とあり、当時の様子を伝えています。 また大正元年の洪水について、大正元年（1912）9 月 21 日午後 4 時頃から 23 日午前 5 時頃まで、連続してどしゃ降りの豪雨となり、鴨部川にかかる広瀬橋、乙井橋、地蔵川橋、鴨庄橋などの橋が流され、川田、中空、西山、鳥田、尻切、川西、そうめんや土堤、小山土堤などが決壊しました。濁流が渦巻く中、鴨部、鴨庄では、民家は流され、避難しそこねた人々は屋根にしがみついて救いを求めたと伝えられています。鴨部では伝馬船を雇い入れ、また鴨庄では漁舟を駆り出して避難や安否確認等を行ったと言います。水位は、鴨部小学校(写真 5)では床上約 1.5m、鴨庄小学校では 1.8m に及んだとのことでした。 水害後、かねてより鴨部川の改修に積極的だった鴨部の素封家（そほうか）、竹内熊太郎は私財を投じて鴨部川の浚渫を行い、土手を築きました。死期が迫る中、竹内は鴨部川改修費にと金 4 万円を寄付することを遺して、大正 10 年に亡くなりました。そののちの昭和 4 年に功德碑建立されています。当時、鴨部、小田、鴨庄地区にあった 3 つの小学校が、平成 26 年 4 月、さぬき市鴨庄に「さぬき北小学校」(写真 6)として統合されています。鴨部川の水害記録に登場する代表的施設や地名の場所を写真 7 に示します。現在の鴨部川は、写真 8、9 のように河道や堤防の整備が進み、水害は少なくなっています。 しかし、さぬき市の鴨部川洪水・土砂災害ハザードマップ(写真 10)では、鴨部川が氾濫した場合の浸水想定深や、もしもの時の避難先が示され洪水災害に備えるように促しています。								
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10				
得られる教訓	この伝承碑は、明治 17 年洪水や大正元年洪水で鴨部川堤防が決壊し、鴨庄や鴨部地域が大きな被害を蒙ったこと、先覚者が私財を投じて鴨部川改修に尽力しことの歴史を伝えています。そして鴨部川氾濫原にある地域は、現在でも大きな水害を受けるリスクがあることを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで 平成以降	

整理番号	香水 7		かつては入江にあった夷神社					
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水	
場 所	香川県高松市木太町 3521							
見所・アクセス	四百年前、入江（海岸）にあったという夷（えびす）神社（写真 1）は、長尾街道の高松木太郵便局の西側にあります。夷神社の説明看板（写真 2）には「寛永以前は、この地は入江にて漁者も住居し蛭子宮ありて、地名を戎と言う。寛永十四年（1637）生駒藩の時、この地以北の海を干拓し新田とした」あり、夷神社は、かつては海岸線に位置していたことが伝承されています。							
写真・図	 四百年前の入江（海岸）にあった夷神社  四百年前の入江にあった夷神社の説明看板  春日付近の地形図  現在の航空写真に夷神社と八坂神社の場所を示す  高松周辺の色別標高図  本太町郷土誌の地図  松島・木太付近干拓地推定図  西島八兵衛に松平頼重による開拓地域を示す  昭和22年米軍撮影航空写真に夷神社を示す  高松周辺の色別標高図 写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10							
解説文	今からおよそ 470 年前の天文十七年（1548 年）ごろの春日惣付近図（写真 3）には、春日付近の様子が描かれています。この図から当時の春日付近は新川、春日川、詰田川は八坂神社の北を高松の方向に流れ、夷神社の場所は、干潟が広がる海岸線にあったことが分かります。 現在の航空写真に夷神社と八坂神社の場所を示した写真 4 及び高松今昔物語（建設省香川工事事務所平成 13 年 7 月発行）の新田開発前の海岸線（推定）地図（写真 5）では、夷神社の長尾街道沿いの詰田川から北側に寛永 14 年以前の海岸線が描かれています。 木太町郷土誌には、讃岐の国での西島八兵衛の功績として、ため池の築造、河川のつけかえ、新田開発などが次のように記されています。「八兵衛は讃岐特有の天井川改修にも意を尽くした。なかでも注目されるのは香東川の川筋付けかえ工事とこれに関連して進めた高松東部の福岡・木太・春日の新田開発である。この工事に着手したのは寛永七、八年（1630、31）ごろ、そして完成を見たのは同一四年（1637）ごろと思われる。（中略）、東側の川筋の下流域から古高松地区にかけて広がっていた寄州や湿地地帯の干拓事業を進めたのである。干拓事業は現在の御坊川下流域の洲端（すべり）地区から東の新川下流付近までを結ぶ堤防を築き、福岡・木太・春日地区に新田を開拓したもので、八兵衛が讃岐で進めたため池築造事業と共に特筆される業績の一つである。」として松島干拓地周辺略図（写真 6）を示しています。 さらに、芳澤直起の研究（宝永地震における高松藩の被害状況：香川県文書館起要第 18 号 2014 年）によると「寛永十四年（1637）年には、それまで遠浅の海岸であった場所に海水の流入を止め、新たに新田を開いた。その新田の場所は、現在の高松市上福岡町、木太町付近である。（中略）、西島八兵衛の干拓事業により、従来、遠浅の海岸付近であった地が田地に変わり、現在、大いに稲作が行われている旨が記されている。（中略）、寛文七（1667）年である。西は松島から東は渦元までという長大な防潮堤を築き、大干拓を行った。これにより、沖松島・木太・春日の地に新たな田地が作られた。また、下往還（志度街道）より南に作られた「新開」という場所に関しては、寛文七年の時に作られたのではなく、寛永年間に西島八兵衛が行った干拓事業の際に、作られた場所であると記されている。」として松島・木太付近干拓地推定図（写真 7）を示しています。 これらの干拓地推定図を基に現在の松島・木太付近の航空写真に、西島八兵衛と松平頼重による開拓地域のおよその場所を筆者が描いたものを写真 8 に示す。図とおり讃岐街道（旧 11 号線、観光通り）沿いより南までは、西島八兵衛による開拓で、それより北は、のちの松平頼重による開拓地域であることが分かります。高松東部の江戸時代の干拓は、大きくは 2 段階で行われ、今日の高松東部低地の発展の礎になったことがわかります。最後に、昭和 22 年米軍撮影航空写真（写真 9）と高松周辺の色別標高図（写真 10）に夷神社の位置を示します。夷神社の付近から北側に扇状に標高が低く、昔の海岸線や現在でも木太地区（詰田川や春日川等）などの低地は、洪水や津波・高潮などの水害リスクが高いことが分かります。							
得られる教訓	私達が暮らしている高松東部は、かつては詰田川・春日川・新川の干潟地帯であったこと。今日の発展は、干拓と堤防や防潮堤等の過去からの社会資本整備によって成り立っていることを教えてくれています。							
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで	平成以降

整理番号	香水 8								
災害種別	水害・治水	地震・津波			土砂災害		渇水・利水		
場 所	香川県東かがわ市白鳥町西山								
見所・アクセス	東かがわ市白鳥町から国道 318 号線を徳島県吉野川市に向かい走行して高速道路の下を通過し、南に約 2.7km を行った湊川の架かる「にしやま橋」手前の旧道を左折し、北に約 100m 進んだ西山地区の道端に悲願地蔵（慶応 2 年寅の水の水害が記された）石碑(写真 1)があります。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5				
写真・図									
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10				
解説文	東かがわ市白鳥町を流れる湊川には、明治の 2 年前に発生した水害記録が残っています。白鳥では、慶応 2 年（1866）8 月 1 日～8 日、暴風雨が続き、湊川上流の福栄西山橋土手堤防が決壊した記録が残っています。この道端にある悲願地蔵（写真 2）には、慶応 2 年 8 月 7 日夜四ツ時（午後 10 時）に稀に見る洪水により堤防が崩れ、流家 60 棟、死者 11 人などの被害が出た旨が記されています。 写真 3 の地蔵石碑の側面（写真 3）には、その水害被害記録が刻まれた文字が残っています。また地蔵石碑の背面（写真 4）には施主・石工の名が刻まれています。 そのことを裏付ける記録が、白鳥町史に次のように残っています。「慶応二年（一八六六）八月 1 日より八日まで暴風雨がつづいた。白鳥町の災害については、一部その状況がはっきり記録されているのがみあった。湊川上流の福栄西山橋土手堤防が欠潰の記録である。西山字新田面の県道端の路傍にある悲願地蔵に刻まれている。「悲願金剛」嘉永四年（一八五一）玄霜月、施主藤井利右衛門、白鳥、平吉、石工、松蔵、「慶応二寅（一八六六）八月七日夜四ツ時（今の午後十時）比古今稀成未洪水面川堤崩此辺如鳴戸大淵ト成流家六十棟死人十一人其外筆難尽後世為心得是略記」この地蔵については、建立年が災害年より十五年逆年であることに疑問をもったが、この悲願地蔵建立後この被害を受け、後ほどこの記録を記したということで問題は解消した。施主、石工は如何なる人であるかも知ることが出来た。…中略…白鳥地方の老人からよく聞く寅の大水というのは、この年の水害か、あるいは天明二年（一七八二）の大水か何れかだろう。何れも寅年である。」とあります。 また「讃岐国大日記」、「高松藩記」には、「慶応 2 年（1866）8 月 7 日、8 日、大風、洪水。8 月 1 日より降り始め、7 日より 8 日にかけて、大暴風雨、堤防決壊、橋梁流失夥し。寅年の大水という。」あり讃岐国に大きな被害があったと考えられます。さらにお隣の阿波の吉野川では、この寅の水の洪水痕跡が徳島市国府町の蔵珠院の寺の茶室の壁に残っています。また過去帳には、この水害によって国中で 37,020 人の男女や牛馬などが溺水、檀家の人 32 人が溺死したあり、幕末の動乱期に起きた「当国御討入以来之水」天正 13 年（1585）の蜂須賀氏入以来の大水と記録されています。 この白鳥町西山地区の悲願金剛地蔵（慶応 2 年寅の水）石碑は、写真 5 のように国土地理院の自然災害伝承地図にも登録されてその場所が分かります。 国道 318 号線の湊川に架かるにしやま橋（写真 6）の下流の旧道沿い道端（写真 7）にあります。 この付近を流れる湊川（写真 8）の洪水から、現在、御神燈が立つ湊川左岸堤防（写真 9）により悲願地蔵石碑がある西山地区は守られています。 しかし、東かがわ市ホームページで公表されている湊川水系湊川洪水浸水想定区域図（計画規模）では、悲願地蔵石碑がある場所は、写真 10 に示すように洪水氾濫区域に入っており、水害のリスクがあることが分かります。この石碑は、気象変動下の今日の大水害に備え、過去の歴史洪水の水害教訓を子々孫々の私たちに伝承する貴重な防災風土資源といえるものです。								
得られる教訓	この自然災害伝承碑は、湊川の過去の大水害の歴史・水害リスクを学ぶための学習教材として、地域住民や学校等によって探訪され、水害に備えるための情報として活用できることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	香水 9		明和 9 年洪水犠牲者供養塔（伊舎那院内）						
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	香川県三豊市財田町財田中 4 3 5 8（伊舎那院内）								
見所・アクセス	国道 32 号線の「道の駅 たからだの里さいた」から県道 5 号の観音寺池田線を通り香川用水記念公園に向かって、約 3.5km を走行する財田中の交差点があります。その交差点右折し約 600m 北西に向かって走行する財田川があります。その財田川を渡った下流沿い 200m の高台に伊舎那院があります。伊舎那院内の墓地の一角に明和 9 年洪水の犠牲者供養塔(写真 1)があります。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5  写真 6  写真 7  写真 8  写真 9  写真 10								
解説文	財田川は、三豊市、観音寺市、まんのう町を流れる県内最大の流域面積をもつ 2 級河川です。上流には塩入り温泉があり、河口近くには銭形砂絵で知られている琴弾公園があります。財田川上流の山沿いのエリアの三豊市では平成 16 年の台風 23 号では床上浸水の被害は発生しています。また下流の観音寺市では平成 30 年 7 月西日本豪雨の洪水で JR 予讃線の橋が流される被害が発生しています。かつて財田川は、広い範囲から水が流れ込むため数多くの水害に見舞われてきました。新修財田町誌（平成 4 年 3 月刊行）によると「現在までの約 400 年間に台風によると思われる暴風雨が 233 回も香川県を襲っています。藩政時代の暴風雨としては、明和 9（1772）年の「辰の洪水」、慶応 2（1866）年の「寅の洪水」が財田川流域に最も大きい被害をもたらしている」とあります。また財田村文化史によれば、当時の惨状を「明和 9 年（1772）年辰の洪水時、財田中之村、長野の林平という者が妻子 4 人を失っています。また大野地の大矢文造は子供 5 人が洪水で流されたが、そのうちの 1 人は幸いにも財田西の円光寺の棕の木に引っ掛かり一命を助かった」と記されています。その洪水で失った四人の子供の供養塔(写真 1)が伊舎那院境内(写真 2)に現存しています。 現在の供養塔(写真 1)は、刻字が風化してほとんど判読できませんでしたが、西面には、かすかに八月二十の文字が読み取れました。現地で、ご住職に藩政期の過去帳を拝見させていただきました。過去帳には明和九年辰年八月に 14 人の方の戒名が記され、そのうち重子 2 人、重女 2 人の子供 4 人が亡くなっていることが分かりました。さらに新修財田町誌の財田に関する気象災害年表には、「明和九年八月二〇日大風雨、倒壊家屋一万九千余戸、死者四六人（辰の洪水）」と記されていました。私たちの先人は、今より 250 年もの昔の大洪水の犠牲者の記録やそのときの惨状などを石碑に刻み、後世の私たちに遺してくれています。 しかし、現在は堤防やダムが整備され住民の方には水害に対する危機感が低い状況が生まれてきています。広い範囲で浸水被害が想定される下流の観音寺市では、財田川想定浸水区域図（写真 3）を示し、財田川氾濫時の水害リスクを公表しています。また三豊市の逃げ場がない上流部などでは堤防の嵩上げや避難情報（写真 4）の周知などが行われています。 財田川河口部や一の谷川流域は、昭和南海地震の地盤地下によりキジヤ台風（昭和 25 年）の高潮被害が著しく大きかったことが四国地方地盤変動調査報告書（昭和 26 年 7 月）に記されています。そのことは現在も財田川左岸と一の谷川流域には、海拔 1.0m 以下の低地が広がっている色別標高図（写真 5）や昭和 22 年航空写真（写真 6）が、高潮・水害の災害リスクの高い場所であることを示唆しています。一の谷川には現在、昭和橋の下流に海水の浸入を防止する一の谷水門（写真 7）が設置されています。 天空の鳥居で有名な高屋神社から財田川下流の沖積平野を望んだ写真 8 を示します。写真の財田川河口の琴弾山には琴弾八幡宮、有明浜の松林の中には銭形砂絵（写真 9）があります。この地域は昔から重要な土地であったことが推量できます。三豊市財田川洪水ハザードマップ（写真 10）に財田村文化史に登場する大野地、財田西と伊舎那院の場所を示します。高台のある伊舎那院へ浸水を免れているが大野地と財田西地区の川に近い集落は 0.5m～3m の浸水が想定されており、水害の危険性が高いことが分かります。 これらの記録や洪水犠牲者供養塔は、過去の自然災害を子孫に伝える防災風土資源といえるものです。								
得られる教訓	この供養塔は 250 年前の洪水による被害記録などを私たちに伝える記念碑であり、今日の気象変動下の水害への備えとして地域の水害特性を知り、瀬戸内海沿岸の低地の水害・高潮災害のリスクを学ぶための歴史災害の学習素材として、災害教訓を今後の防災に活かしていくことを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降	

整理番号	香水 10		大正 7 年洪水被害を記録した耕地整理記念碑																									
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水																					
場 所	香川県三豊市三野町下高瀬																											
見所・アクセス	高松自動車道の三豊鳥坂インターを出て県道 220 号の大見吉津仁尾線を仁尾に向かって約 3.2km を走行すると高瀬川に架かる三野橋があります。橋を渡って右折し高瀬川左岸堤防道路を下流に向かった 300m 先の堤防下の公園に、大正 7 年洪水で高瀬川の堤防が決壊したことが記された耕地整理記念碑(写真 1)があります。																											
写真・図	    																											
	    																											
	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10																											
解説文	高瀬川は、香川県西部の三豊市を流れる全長 15km の 2 級河川です。上流の高瀬町は高瀬茶で知られる県内有数のお茶の産地があり、高瀬川が流れる先に瀬戸内海の小さな島の子供の神様で有名な津嶋神社があります。高瀬川は高瀬川水系河川整備計画よれば近年では、平成 16 年 10 月の台風 23 号により家屋浸水(床下 104 棟、床上 8 棟)、浸水面積 408ha の被害が発生していますが、最近は大雨などにより堤防決壊などの大きな被害は確認されていません。しかし、大正時代には堤防が決壊した記録が刻まれた碑(耕地整理記念碑)写真 1 が三野町下高瀬にあります。この下高瀬地区に昭和 21 年建立された耕地整理記念碑文(写真 2)には「大正 7 年 9 月 14 日の洪水に当たり、高瀬川堤防 240 間余(約 440m)の決壊によって近接の本地区に土砂流入し、多い所は 4 尺(1.2m)を超える堆積があり、そのために約 10 町歩(100,000 m²)余りの稲田は、たちまち荒廃地と化し、耕作まったく不可能になる惨状である。・(中略)・大正 8 年 9 月に耕地整理組合設立し、・(中略)・大正 15 年 11 月 1 日をもって全事業を終了、・(中略)・ここに事業経過の概要を記し後世も伝える。」と、洪水被害とその後の耕地整理事業の経過が記され、後世の私たちに過去の災害の貴重な教訓を伝えてくれています。 高瀬川の下流部は、堤防が高く高瀬川下流平野の色別標高図(写真 3)に示すように土地が低く川の周辺に広がる平野は海だとされ、干拓などで田畑や住宅地に姿を変えた土地は低い高さにあります。その低地は、住民の多くの皆さんにはあまり知られていませんが昭和南海地震の地盤沈下で、戦後、高潮災害(写真 4)に見舞われました。四国地方地盤変動調査報告書(昭和 26 年 7 月)によると当時、河口にあった塩田や海岸堤防が被害を受け、詫間町の池尻では満潮面より耕地面の方が低くなり水田は収穫が 1/3 になってしまうなどの大きな被害を受けたことが報告されています。写真 5 の高瀬川下流干拓平野の戦後航空写真と高瀬川河口に塩田が広がる写真から、その被害や地域が昔から塩田で栄えた重要な土地であったことが推量できます。そのため、地盤沈下による湛水被害及び塩害の防止のため宮三野詫間地区地盤変動対策事業(写真 6)が行われ、詫間水門(写真 7)が河口から約 1.5km の場所に造られました。そのことは、現在でも下流部は高潮・水害の災害リスクの高い場所であることを示唆しています。しかし、住民の皆さんには危機感があまりないのが実情です。現在、高瀬川の洪水基準点になっている三野町の三野橋の橋脚に香川県は、写真 8 のように住民避難に直結する避難判断水位が表示され避難情報の周知を行っています。 高瀬川の西の稲積山から高瀬川下流の沖積平野を望んだ写真 9 を示します。写真の左に瀬戸内海に注ぐ河口があります。三豊市高瀬川洪水ハザードマップ(写真 10)に耕地整理記念碑、三野橋、詫間水門、低地の池尻の場所を示します。河口から約 5.3km 地点の三野橋付近の下高瀬地区など高瀬川に近い低地にある集落は 0.5m～3m、下流の池尻地区は 3m～5m の浸水が想定されており、水害の危険性が高いことが分かります。 この大正時代の高瀬川堤防決壊の被害を伝承した記念碑は、現在、耕地整理記念碑として国土地理院の自然災害伝承碑地図にも登録されており、過去の歴史を子孫に伝える防災風土資源といえるものです。																											
	得られる教訓 この耕地整理記念碑は大正時代の洪水による被害記録などを私たちに伝える記念碑であり、今日の気象変動下の水害への備えとして地域の水害特性を知り、瀬戸内海沿岸の低地の水害・高潮災害のリスクを学ぶための歴史災害の学習素材として、災害教訓を今後の防災に活かしていくことを教えてくれています。																											
	<table><tr><th>教訓分類</th><th>被害防止</th><th>準備</th><th>災害対応</th><th>復旧・復興</th><th>自助</th><th>共助</th><th>公助</th><th>ハード</th><th>ソフト</th></tr><tr><th>時代</th><td>江戸時代以前</td><td colspan="2">江戸時代</td><td>明治・大正</td><td>昭和 30 年代まで</td><td colspan="2">昭和 60 年代まで</td><td colspan="2">平成以降</td></tr></table>									教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト	時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト																			
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降																				

整理番号	香水 1 1	かつては海岸松原にあった春日神社の水害記念碑							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	香川県高松市春日町 736（春日神社境内）								
見所・アクセス	高松自動車の高松中央インターから北に向かって県道 43 号を約 1.4km 走行する木太町木太南小学校北の交差点があります。その交差点右折し約 1.2km 西に向かって走行する春日川があります。その春日川を渡った 250m 先に「うどんのかすが町市場」があり、その手前 50m の小道を左折して北に 200m 進んだ所に春日神社があります。春日神社境内の一角に昭和 51 年洪水の被害が記された記念碑（写真 1）があります。								
写真・図	春日神社の昭和 51 年洪水被害が記された記念碑 かつては海岸松原にあった春日神社 高松周辺の地形図 春日川と新川が干拓地によって繋がっていた様子 新川河口部の琴電橋梁の左岸堤防に、新川河川激特事業竣工記念碑								
	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 かつては海岸松原にあったことを伝える春日神社境内の石碑 新川・春日川下流部の地形図を望んだ写真 戦後の米軍撮影写真に写る新川河口部の堤防 春日川と新川が干拓地によって繋がっていた様子 新川・春日川洪水ハザードマップ 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10								
解説文	春日神社（写真 2）は、現在、春日川と新川にはさまれた低平地（写真 3）にあります。天文十七年（一五四八年）の春日惣付近図（写真 4）が示すように、かつては海岸松原にあった春日神社から北は干拓地でありました。そのため川よりも低い場所があり、昔から繰り返し氾濫した歴史があります。近年では境内の記念碑（昭和 62 年 11 月吉日建立）（写真 1）には、「当地は春日川・新川にはさまれ、古より幾度となく水害に悩み続けてきたが、たまたま昭和五十一年、第十七号台風のため多大の損害を受けた」と昭和 51 年洪水被害が、また新川河口部の琴電橋梁の左岸堤防には、新川河川激特事業竣工記念碑（平成 6 年 3 月吉日建立）（写真 5）があり、昭和 62 年 10 月洪水で「新川及び支流吉田川では、数か所破堤溢水し、高松市は春日町、東山崎町、前田西町、前田東町、亀田町及び木田郡三木町で 870ha にわたって浸水した浸水家屋は 4200 戸余に及び、農地公共土木施設なども甚大な被害を受けた」とあり、近年においても床上浸水の被害は発生しています。春日川と新川にはさまれた下流部の低平地は水害のリスクの高い場所であることを示唆しています。 現在、かつて海だったこの新川に並行して流れる春日川の下流の高松市東部の沖積平野には住宅地が広がります。いまは住宅街になっている沖積平野は、かつて海が広がっていて干拓されたことが、春日神社の 2 つ石碑に残っていました。その一つが春日神社由緒記の石碑（写真 6 の右）に「海岸の松原に社殿を造営し、氏神大明神とした」とあり、もうひとつの春日神社の碑（写真 6 の左）には、「当春日神社は今の地海岸松原に氏神として社殿を建造し、約壹阡有余年を経る」とあり、社殿を建てた当時、この神社から北側は海だったことが示されています。 新川は新田開発のため新しく開削された人工的な川と思われます。実際、古い地図や今も田んぼの中に残る川らしき跡、現在の航空写真（写真 7）や戦後の米軍撮影した写真 8 などからわかります。高松今昔物語の中に、春日川に合流していた推定される新川の場所図（写真 9）があります。この図には新田開発前の海岸線の推定線とともに昔の新川の流れていた場所が描かれています。その図によると、新川は昔、久米池の南、久米山の西の東山崎町あたりから元山町で春日川に合流していたと思われます。 今のような流れになった時期は、明らかではありませんが、1746（延享 3）年に増田不意が著した「讃州府誌」の巻之一、寛永年間についての記載の中に、「十四年春、西嶋氏堤防を香川郡福岡、山田郡木太、春日の新田海濱に築き、潮汐を障げ、稲田と為す。之を新開と謂ふ。」と 1637（寛永 14）年に西嶋八兵衛が堤防を築いて新田開発をしたことが記されており、この時期だったと考えられます。 新川・春日川洪水ハザードマップ（写真 10）に春日神社等の位置を示します。新川と春日川に挟まれた春日神社下流の住宅地は 3m～5m の浸水が想定されており、水害の危険性が高いことが分かります。 これらの普請や水害記録、記念碑は、過去の自然災害を子孫に伝える防災風土資源といえるものです。								
	得られる教訓	およそ 470 年以上も前から海岸部にあった春日神社や境内の石碑は、高松市東部の発展の歴史を知る上の貴重な伝承であり、今日の水害への備えとして、瀬戸内海沿岸の低地の水害・高潮災害のリスクを学ぶための歴史災害の学習素材として、災害教訓を今後の防災に活かしていくことを教えてくれています。							
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			